

聖書：ヨハネの黙示録 21：5～8

説教題：すべてを新しくする

日時：2021年10月17日（朝拝）

ヨハネは前の21章1～4節で新しい天と新しい地を見ました。今、私たちが見ているこの世界とは性質が大きく異なる世界。悪がさばかれ、その痕跡すら見当たらない義の世界。ヨハネはさらに花嫁のように飾られた聖なる都・新しいエルサレム、すなわち美しい姿に完成された神の民の共同体・教会が神の御手のわざとして天から降って来る光景も見ました。そして大きな声が御座から出て、こう言うのを聞きました。3～4節：「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しきもない。以前のものが過ぎ去ったからである。」

これを受けて今日の5節で御座に座っておられる方が声を発されます。これは神ご自身の声と思われまふ。その方が言われました。「見よ、わたしはすべてを新しくする。」神が後の日に新しいわざをなさること、新しい天と新しい地を出現させることは旧約聖書にすでに述べられていました。イザヤ書43章19節：「見よ、わたしは新しいことを行う。今、それが芽生えている。」同65章17節：「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。先のことは思い出されず、心に上ることもない。」この約束の通りに神はここで「見よ、わたしはすべてを新しくする」と言っておられるわけです。特にここでは「すべてを」新しくすると言われてまふ。ある意味で神の新しいみわざはこの世界ですすでに始まっています。コリント人への手紙第二5章17節：「ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」これは信者がキリストにあって霊的に新しく誕生したことを表現したものです。そういう意味で私たちは「新しくする」神のみわざの一部にすでにあづかっています。しかし神は、やがての日にすべてを新しくすると言っておられます。私たちになされてまふ救いのみわざが完成するだけでなく、この世界のすべても新しくされる。罪の呪いや染みが一切取り除かれ、神の最終的な御心に全く合致した世界が現れる。前回、今の世界とやがての世界には連続性があるということ述べましたが、だからと言ってやがての世界は今の世界をいくらか改善したという程度のものではないのです。やがての日に私たちの

瞳に映るのはこれまで見たことがないような自分であり、またこれまで見たことがないような新しくされた世界です。神はご計画くださった最終状態、そのゴールへとすべてを導かれるのです。

そして続けて言われました。「書き記せ。これらのことばは真実であり、信頼できる」と。「書き記せ」と神が言われたのは、これが非常に大事であって、私たちが常にこれに心を留めるためです。「これらのことばは真実であり、信頼できる」とあえて付け加えられているのは、私たちが確信をもってこの言葉により頼むためでしょう。ともすると日々の戦いや困難の中では神がすべてを新しくするという約束は非現実的な話のように思われ、むしろ目に見える現実に埋没してしまうかもしれません。しかしそうであってはならないのです。神は確実にすべてを新しくする日を来たらせられます。私たちは全面的にこの言葉により頼んで生活して良いのです。そのような言葉として、ヨハネの黙示録とそこに記されている約束は私たちに与えられています。

神は続けてヨハネに6節で「事は成就した」と言われます。すべてが新しくされるのはなお将来ですが、それは確実に実現することとして「成就した」と言い切る形で言われています。これで思い起こす言葉は何でしょうか。それはイエス様の十字架における「完了した」というお言葉でしょう。イエス様は地上の生涯において最後まで父なる神の御心に従って歩み、その尊いご自身の命を私たちの身代わりとしてささげてくださいました。そのことにおいて私たちとこの世界を贖うための必要な代価をすべて払われました。あのイエス様の「完了した！」と言われたみわざに基づいて、神のご計画のすべてが最終ゴールに達する日は必ず来るのです！「わたしはアルファであり、オメガである」という言葉は1章8節にも出て来ました。ご存知の通り、アルファはギリシャ語アルファベットの最初の文字であり、オメガは最後の文字です。ですからその後に「初めであり、終わりである」とも言われています。この意味は、神は世界の歴史の最初から最後まですべてを支配している方であるということです。単に最初の時にもいて最後の時にもいるという程度の意味ではなく、神はこの世界の歴史の始まりを導いた源なる方であり、また世界の歴史をご自身の定めるゴールへ導く完成者なる方であるということです。このように述べたのは、この後に述べられる約束がより頼む者の上に必ず実現することを確信させるためです。以下、神がもたらしてくださる2つの祝福が語られます。

一つ目は6節後半です。「わたしは渴く者に、いのちの水の泉からただで飲ませる。」乾燥したパレスチナの地方では、冷たい水の泉は貴重であり、それはそこから飲む者をリフレッシュさせ、生き返らせるものでした。ここで「いのちの水の泉」と言われていますが、これは「永遠のいのち」という水の泉という意味でしょう。ヨハネの福音書17章3節：「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」人は神との交わりを通して自分自身を真に満たすいのち、永遠のいのちに生かされます。このようないのちの水の祝福に神がやがて民を生かしてくださることは、旧約聖書から約束されていました。イザヤ書40章10節：「彼らは飢えず、渴かず、炎熱も太陽も彼らを打たない。彼らをあわれむ者が彼らを導き、湧き出る水のほとりに連れて行くからだ。」この祝福にあずかるための条件が今日の箇所を示されています。それは「渴く者に」ということです。この「渴く」とは神に向かって渴くということです。詩篇42篇1~2節：「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ、私のたましいはあなたを慕いあえぎます。私のたましいは神を、生ける神を求めて渴いています。」神に対して渴かず、他のもので自分を満たしている人には、これは与えられません。これを受けるための唯一の資格は渴く人、神に対して渴く人であることです。

そういう人にただで飲ませるとあります。ただであるとは、これがただ神の恵みによるということです。そしてそのためにキリストが十字架上で代価を払ってくださいました。イザヤ書55章1節：「ああ、渴いている者はみな、水を求めて出て来るがよい。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買え。代価を払わないで、ぶどう酒と乳を。」神はこうして一方的な恵みをもって、渴く者にいのちの水の泉から豊かに飲ませてくださるという日を、アルファでありオメガである方として必ず来たらせてくださるのです。

もう一つの祝福は7節です。「勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。」 「勝利を得る者」というフレーズは黙示録前半の7つの教会に対する主のメッセージに繰り返し出て来ました。その意味は、それぞれの教会が置かれた状況の中で、主への信仰に堅く立ち、困難に打ち勝つ人、それを乗り越える人という意味でした。その意味はここでも同じでしょう。つまりクリスチャンはただイエス様を信じますと口で告白すれば、生活は多少どうでもいいということではないということです。その時々都合で主を否定したり、妥協した生活

を送っても、イエス様を信じますと告白してさえいけば神は私を救ってくれるというのがキリスト教ではない。勝利を得る者、キリストに信頼して実際に打ち勝つ者であることが求められています。その人こそ 7 節で「これらのものを相続する」、すなわち新しい天と新しい地を相続すると言われていました。神は彼の神となり、彼はわたしの子、すなわち神の子どもと言われていました。その人はただ新天新地に入れていただくだけでなく、神との関係において「父と子ども」という親しい愛の交わりへと導かれ、その関係において永遠に渴きをいやすいのちの水を豊かに飲む者とされ、また新天新地のすべてを相続する者とされるのです。

しかしこれとは対照的な人たち、この祝福にあずからない人々のことが 8 節に述べられます。一方の人々は新しい天と新しい地を受け継ぐのに、もう一方の人たちの受ける分は「火と硫黄の燃える池の中にある」と言われます。これは一体誰のことなのでしょう。火と硫黄の燃える池の中に投げ込まれる人たちのことは、すでに 20 章 11～15 節の最後の審判の幻において示されました。それはイエス・キリストを拒否して自分の罪を残した人たちであり、またサタンや獣の側につく人たちでした。しかし今日の 8 節を単にそのような不信者のことと見るだけでは足りないと思います。このリストを見る時に分かることは、ここで特に考えられているのは教会の中にはいるけれども、この世と妥協するいわゆる名目上のクリスチャンのことであるということです。

一つ目に「臆病な者」とあります。これは性格的な臆病のことでしょうか。そうではないでしょう。またこれは主を信じない一般の人々を指す表現とも思われません。これは教会の中にながら困難に囲まれると主を告白しない人、むしろこの世と調子を合わせる人、身の危険を感じると自分の信仰を引っ込める人のことでしょうか。二つ目の「不信仰な者」も同じです。一般的な意味で不信仰な人々というより、この世の様々なプレッシャーの中で信仰を否定する人。神を信じずに人の顔色ばかりを窺う人。三つ目の「忌まわしい者」とは何でしょう。「忌まわしい」という言葉は、特に偶像礼拝を指す表現です。これはこの世で成功するために同業者の組合の神を拝むようなことをする人、また特に皇帝礼拝に屈する人のことでしょうか。次の「人を殺す者」は 13 章に出て来た獣の活動と関連していると考えられます。ローマ皇帝を拝まない者は殺すという圧力の下、それに屈しないクリスチャンの中には、2 章 13 節に出て来たアンティパスのように殉教する人もいましたが、他のある者たちはいとも簡単に信仰を否定し、むしろ獣の側に付くことによって、信者仲間を見捨て、裏切り、そのいのちを

取る側に加勢したということです。次の「淫らなことを行う者」も異教の偶像礼拝への参加とセットでしばしば行われたことでした。次の魔術も偶像礼拝と関係します。その次の「偶像を拜む者」はまさに今述べている通りの人です。そして最後に「すべて偽りを言う者たち」とあります。テトスへの手紙1章16節：「彼らは、神を知っていると公言しますが、行いでは否定しています。」 黙示録3章9節：「見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しているが、実はそうではなく、嘘を言っている者たちに、云々」。サタンは「偽りの父」と聖書で言われていますが、そのサタンに従う者たちとして、彼らは「嘘を言っている者たち」と言われています。これに対して信者たちを指して、黙示録14章5節で「彼らの口には偽りが見出されなかった」と言われていました。つまり一見したところ、教会に出入りし、その交わりの中に見える者であっても、実生活ではそれに反する生活をする人たち、むしろサタンに従っている人たちは最後にさばかれるということです。これはもちろん1回でもここに書いてあるようなことをしたら、もう救われないということではありません。ペテロも主を否むという臆病な姿、不信仰な姿をさらけ出しました。そのようなことがあったとしても、そのことを悔い改めて主に立ち返るなら赦しがあり、聖めがあります。ただこのような生活がその人を特徴づけているものとなっているなら、そういう人は先に述べられた祝福にあずからないということです。その人の受ける分は火と硫黄の燃える池の中にある。「これが第二の死である」と言われていますが、以前に見ましたように、これは最終的な永遠のさばきを指しています。このような言葉がここに記されているのは、この警告に照らして私たちが自分自身を吟味し、正しい信仰と正しい生活へと導かれるためです。

以上、今日の箇所御座に座っている方、神は「見よ、わたしはすべてを新しくする」と言っておられます。今、私たちが目にしている世界はいつまでも続くものではありません。私たちは神がキリストにあってもたらしてくださった新しさを幾分味わっていますが、これで終わりではないのです。神は「すべてを」新しくする！と確約しています。私たち自身も、この体も、そしてこの世界全体もです。その日を待ち望む私たちに求められていることは、神にこそ向かって渴く生活をする事。この世の過ぎ行く一時的なもので自分の心を満たしてしまうのではなく、真のいのちを与えてくださる神を慕い求めること。そして勝利を得る生活に進むこと。すでに勝利したキリストに結ばれて悪魔の誘惑を退け、実際に日々主に従う生活へ進むこと。神が示してくださった最後の祝福の日を見つめつつ、そこに至るにはこの道を進む必要のあ

ることを改めて心に留め、そのための力も主に祈り求めて、この道を進む者でありたいと思います。そして神によってすべてが新しくされた世界に導き入れられ、いのちの水の泉から豊かに飲み、新天新地を相続し、神の子どもたちとして歩むというこの上ない救いと祝福に生きる者へ導かれて行きたいと思います。